

「平和な空の下で生きるために」

—緑ヶ丘保育園で起きた米軍ヘリ落下物事故—

普天間バプテスト教会／付属緑ヶ丘保育園

牧師／園長 神谷武宏

昨年の12月7日、その日私ども普天間バプテスト教会付属緑ヶ丘保育園では、来週末に控えるクリスマスの行事のため、子どもたちは、聖誕劇の練習、讃美歌の練習など、子どもたちがとても楽しみにしているクリスマスの準備をしていた最中にありました。

午前10時20分ごろ、園庭には、2歳、3歳児クラスの子どもたちが、天気の良い青空の下で遊んでいたのです。突然、ドーンという大きな音が園内に響きました。その音で振り返った保育士は、屋根の上で大きく跳ね上がる物体を見ています。その屋根の下は、1歳児クラスの部屋で、今から園庭に出ようかとしている時でした。ドーンという衝撃音を聞いて、2歳になるかならないかの幼い子どもたちは、「わーっ」と声を上げ、先生方も一緒に驚きました。その物体はわずか50センチのところで屋根の上で止まっていたのです。あと50センチずれていたらと思うと本当に「ぞっと」します。

米軍は、落下物の「もの」自体は、米軍の物だと認めましたが、ヘリ飛行中に落としたものではないと否定しました。米軍がヘリから落としたものではないというのであれば、どこから落ちて、誰が落としたのでしょうか？米軍が落としていない、事故ではないというのであれば、これはもう「事件」です。殺人未遂事件です。落下を認めない米軍は、翌日もいつもと変わらず、米軍ヘリやオスプレイが子どもたちの上空を飛び交っています。私たち保育園は、父母会が中心になって3日後には父母会の全会一致の「嘆願書」を作成しました。その嘆願書には3つのお願いがあります。

①事故の原因究明、および再発防止 **②原因究明までの飛行禁止** **③普天間基地に離発着する米軍ヘリの保育園上空の飛行禁止**

米軍側が、事故を事故だと認め、真摯に向き合っていたら、防衛局・防衛省が強く米軍側に抗議していたら、一週間後の普天間第二小学校の米軍ヘリ窓の落下事故は無かったはずですが、今回もたまたま怪我人は出ませんでした。だからと言って許される問題ではありません。子どもたちの「いのち」が危険にさらされたのです。一歩ずれていたら、子どもたちの命が失われたのです。このような状況を許すわけにはいきません。

先日(12/28)、沖縄・米国総領事館に嘆願書と署名を持って、父母会役員と出向きました。私は問いました、「沖縄の子どもたちと米国の子どもたちとは、命に格差があるのですか？子どもたちの上空を毎日のように米軍機が飛び交うことは、沖縄の子どもたちの命が軽視されていることではないですか」。私たちを迎えてた政治軍事経済担当のダウアーさんは、「決して、米国の子どもたちと沖縄の子どもたちの命に格差はありません」と答えています。勿論そうでしょう。しかし現状は、余りにも命の軽視があらわにされています。

子どもたちの「いのち」を守るために、平和な空の下で自由にのびのびと遊べ、暮らせる空にするために、声を上げて行かなければなりません。